

三省錄

後編

二

9
3780
7



3780
7

昭和二十一年
六月五日
八田清吉氏
長男五郎君
氏書贈
圖書印

三省録後編

原義輯

飲食之部



○食を生命の本根一日も欠くべからざるを知られざるあり此の
は穡の字といれちのねと訓中略して穡とよむあら
と學ばざる人とは理を知らず米銀のふとを論するハ
いやきこととゆふ偏見より足食のものをいふとよう
ととなり貧困よりして禮義すれ家業もなりけりては
てハ盜竊の災あるを知らずみづからくもれ
とすらず他人は損失をあてふ水旱風虫の蓄もなく百
行かけてけしむるむを盡せ至る民ハ以食為天と
酈食其漢王は説しあともりあり抑人と生せても油

乞^ことして飢^うを多^{おほ}する人もあらず。備役^{ひやく}して其日^{そのひ}この命^{いのち}とばなぐもあらず。日^ひと農業^{のうぎやう}は辛苦^{しんく}を志^しふべし。其穀物^{そのこくぶつ}を十分^{じふぶん}に食^くふとすべし。や^やき食物^{じきぶつ}も世^よとむるもあらず。志^しを富貴^{ふうき}に人もやすきは居^ゐて危^{あやう}を多^{おほ}す。其右^{そのみぎ}のおと^{おと}艱難^{かんなん}してづもむるも世^よとむるもあらず。一盤^{いつばん}の餐^{さん}も粒^{つぶ}は皆^{みな}辛苦^{しんく}なることと識得^{しきとく}すべきなり。是^{こゝ}は反^{へん}してあらず。よきものを家人^{かじん}と労^{ろう}を怠^たる。飽食^{ほうしき}酩酊^{めいてい}してふもむるも食^くするも朝夕^{あさゆふ}の烟^{けむり}はへる。この勞役^{らうやく}辛苦^{しんく}してやうくと半^{はん}を菜芥^{さいがい}とす。え炊^くく人^{ひと}あるをす。此^{こゝ}あり見聞^{けんぶん}とあらず。なれど沈醉^{しんさい}飽食^{ほうしき}の人天道^{てんどう}恐^{おそ}るべし。尚儉撮^{しやうけんさつ}要^{よう}

○先年^{せんねん}慶長四年^{けいちやうしに}の古田^{ふるた}兵部^{へいぶ}は清取^{せいと}と見^みる。米^{こめ}は價^{あき}あて後^ごに考^{かんが}へるもあるべし。此^{こゝ}は記^しす。國初^{こくしよ}は米^{こめ}を賤^{せん}にけし。是^{こゝ}を諸侯^{しよこう}の患^{うれひ}もあらざる。米^{こめ}諸物^{しよぶつ}もいや^いさし。ちり

清取銀子之事^{せいとぎんしのこと}

合百文目者^{あひひやくぶんめしや} 但十文目者^{ただじふぶんめしや} 一石^{いしやく}也^{なり}

右之米拾石より外^{ほか}を以^{もつ}て清取^{せいと}處^{ところ}實正^{じつしやう}也^{なり}。仍^{なお}如件^{ごとく}

慶長四年卯月十五日

兵部^{へいぶ}印^{いん}

使^{つか}馬場^{ばば}千左衛門^{せんざゑもん}

右の本書^{みぎのほんしよ}ハ草^{くさ}きより字^じも多^{おほ}く大^{おほ}あり。本^{ほん}書^{しよ}に字^じを別^{べつ}に添^{そへ}む。續草廬雜談^{じよくそうろざいたん}

○本郷森川宿内先主組屋敷は内山氏といふ同心あり其先
祖は北條家旗下の士として氏政より此下知状数通を蒙り
て其中は内山氏出陣の節ある葉門より見舞はれ書状
ありて一見せしむるなり

然るに越え何今般へ出陣は越河へ入る幸勞已識
察に然る雖も少い納豆を合已進之に誠以て問近
い諸般出陣陣之時分委曲にて述はるるに
三月上旬
津安寺
欽卷

内山弥右衛門尉殿
内陣所

義熟考は葉門のすなはち納豆の進物をよりし
あるづー然れども然る陣所へ贈るは僅き合は食用
今世よりこれを見れば誠は一食は堪ふるやうなれども
よこより古昔は質直なまされは教す其品少といふ
も其情厚きこと僧よりて如此今世は人情衰傷の
なりてて微少の品は贈るは恥し受るもれも動もす
まは其軽重を論ずあれみる実意を以て交るはあら
ば只君飾を以て授するなり殆威歎のあやめなり

○人間一日は食料五合と定まり古き時より此分料と見え
其以前は定てなまよふと見えたり二合五夕飯新武者物

語云人の食物ハ物言ニ合ミクズ然ベト（龍川左近
將監積正定められしなり按はこは一度れ分量を云物
クもてを合なり）

○續武家閑談十二云或人曰る此急なるときは食事を調へ
則ち馳出せハかゝらば息切せよと吐逆すべし依る食へ
き糧を腰につけ馳出て事此するるとき食づきあり天
正十二年長久寺より安藤孝春成瀬小吉働き終り
て獲を採てハ食物有くゆえゆくと快く食て飢るこ
となるなりとぞ物トて出る時飽まで食て出せを却て
早く飢るをせあり少く食ふ食はずて腰に付るなり志
うと云貞丈云常は劍槍亦習煉の仕合も食ひて直に

もつらげバ息喘ぎ吐逆するなり武士ハ常は美食を好む
ちとあれれ粗食を食ひ習ふべし軍中ハ美食ありま
ゝ大食を好むべしなり癖はなるなり俗諺は早食ハ子尿
早走アリハ常は心掛べし習ふべし

○凡生活するも其生命を多しつるも其ハ食物あり故は鳥
獸魚虫に至るまで食物を求るを以て勤とい況や人倫
をや赤子出産すれば直に乳味を求め生長して四民各其
家業を勤るハ食物を求るが為なり食せば生じ生じ
る生命を多しつるもあらばは人倫の至宝ハ五
穀あり金銀珠玉を以て五穀を買ふんと欲するとい
ども凶年飢歳あるハ兵乱ホよて五穀を賣るも其

あま天下の大存ふれとて大臣の命ありて國の庫藏を
立糧と積貯けをく其倉庫の跡今は所厨といふも
へ凶年不慮の変ありて七糧なくして萬事といひて
すくむるべきを都てく城米かく心得ある處と
被仰付々るとなり 武野燭談

○神祖の仰は曰農工商ハ國に寶あり第一農人のくろくを
一粒百功とて去年の秋より種をとり春ハ田をうへ夏
をききり風寒暑湿を凌ぎらるく苦勞して秋を稲と
ふ米となりて君はなり諸人をすくひ盡ふ誠り莫太
の苦勞す莫太の勲功ありはれゆえは君子ハ一度飯を
食するは民の苦勞を目すればすく民を稀まつふとて

もき止るを不給して民をはうとて民の隙を用ふ
ず民ハはれ國の本なりそこをふづらず本をくられを
國やとといひ 御遺訓附録

○權現様あるとき田舎へ鷹野とて渡御はせられ面々
年の麦作あり豊年と見えたり其作を見定はれとて
あやありたるを物て麦左よりはる年ハ不作なるもの
なりあは麦右よりはるゆゑ豊年あり其上百姓幼き子
は氣づき難きなりはれ母の雜穀を食せず乳味を海
山あはをなりとて去年は芋莖々々崩れるを以てはれ糧
のつきづるを知べと所定ありはれ芋莖とて去年芋を積
壘土をわけてたくりたるあり 續武家閑談

義云誠は恐多しあがら鄙事多能の由聖憲ありて卑
賤の情態より廣く後らるゝと鄙有き神祇なり
當今豊饒の諸侯ハ芋此貯けりて志るを其神あり
たは太平此恩澤とハチあがらする民家のいとを
志らるゝあり

○大猷院様の由時永井氏の人名ハ失念なり由近習より久々煩
被中あより久き義は由故中より出されしとあるは由
読みよりいれとより顔色のあきを見り其方よりあ
くはなる勤る事あるより見るより引込より遠
き養生よりいれと由直は上意より堀田氏なる側より
社中郭有上よりい子速み爲養生より社中帰宅い

しはて十五日も過いてその度いすさと本後にて出され
生いハ由側よりい何とより米の直販を何程は
憂いより由是なり生いハ志より不存なりいより何
程はより由是なり生いハ志より不存なりいより何
由是なり生いハ志より不存なりいより何
老中もいハるよりいれぬより其方より近習心やす
きはれは尋いて此方より得するよりい然らばより
のよりいハ其方より能くおさるより時分つばは
より上は根よりいよりえやよりいよりいよりい
業ありよりいよりいよりいよりいよりいよりい
百日よりいよりいよりいよりいよりいよりい

いふありと御意に違ふは若中う口を操へる何れも
仕生所食事此進ませるハよろしき事なりと申す
醫師中より老若男女上より下も食ハ食ハある中
一は結構あるは幾と祝しなり君臣民はあそはれ
左様にてある中食するといふはハ不節甲乙なく其
時を違ひて是不足なく定食といふは人君の若
生れよきと申すは是るもきハひるを破て不足なると
きハ兼つる必定多りる及あきを才一とくそせとこ
そ命ハ食ハありといふは其食といふは有りたる
ふと云ふるるハ甚あくつた多く喰ふハよきこと
はあらざるをいふハあらどと上意あそはれし

は内醫師も赤面して始て食ハ食ハありと申す事
きやハ中と申すは上なることなり 同書

○同代後唐某此種を所取寄諸國代官へ命ぜられ種
と申すは下所より作らるる其形魚形にて某氏見別
けるは此ゆえ是を喰ふはあて林朝散太夫大学以
亮は命ぜられて後唐某の切能き開板有て人是を喰て
それ後あるとと記しをぬひはよきとく人々うきひ
とあてて々々上へ一統は是を賞翫し甚夫食の助と
なり世に重宝うへなきはなり明君の御仁徳のする
ところはあらばや有るふと申すも愚なる事なり 同書

○鯉郎と上皮けづとて中を帯はるは物あましくもいふ

る時七つといへば殊の外力あるより水飲を竹うて
腰拵よもつべー

○うちづひは干飯よくい本絛うちづひれ中にあるをさうい
ゑて入絛は付いへばちくく嚙いよくいさくはうちづひさ
ら水は入て少くかけば程強て飯のやうになるもれなり
と吉右衛門やいせいの梅干の肉をすり縮まつて糸
をつけちぢべー砂碇もよくいより同人うりい

○鍋ちくして食するやう米をちぢまつて水よくよくゆりて
地と堀里堀こそれ上は火をあげば飯になるなり

○大豆と干飯のやうよりてうちづひへ拵べー人も馬も喰まで
よくいよりさちいさなり 以上遺老物語

義云これ品々戦場のいほふれども當時僻地へ旅行をど
よへものるべーやう大名とても戦場の時ハくる品々
飢渴を凌ぐひをあらぬ艱苦也といへるなり

○酒井家の藩士等惣文右衛門といふ人城中は宿直する時も
弁当をば拵す干飯の焼米の類を袋に入れて拵袋で用さ
ときハ取出しすうづ食ひて多く食せば一日二度ある
ひを三度と定て度々ハ食する事あり用ある時をだ
て食ひけり其故を問は多く食をばせ中なる事ありあ
や隙とし費はば陣中より甚便利なりといへ用事ハ
弁当の品々取調へる事を見て泰平は代とハ云ながらあ
かり委しめる事ありとて大は歎息をいふなり謂やう茶

卒にどあやうきもれをきりあるあやうきをむり
見せし圖にすするあとしをのり悦ぶるあやう
なり かつらひき

○真田伊豆守信幸或とき船中より岸の松菜を詠み世中
へ松菜めー松菜やと尋るは松菜もれきりといふはぞ
あらん天下平均の松菜なり某ハ勝頼没落のみぎり道り
て毎度かれを食す甚だうきききなりすし稗粥をも切
い松菜をばりいやまれありあは憂目を見るも家中
を憐む一松とあるより中閑らせあり 續武家閑談

義云乱國のはは誠はあそろーききとらばや今治平
の世は生きたるはあそ松菜を喰ふあともあつるべし

日く飽食暖衣して美膳を好み味醂あつて老味ひかり
輕節いせひば昔うらに切目洞ハはせは興ありなごり
あくの誇りと吐れ天謎あるー空腹ありはつと者
く味あて晩食して松菜は當るゝ宜なるゝ予は年東
遊の節那須野殺生石一見きんとて七里の廣原よの
うし昼食の夜を黒川といふとろろある農家は
乞得て稗飯を喰ひーあきあり里ふ々世はも遠郷僻
地はへくる品を常食とせるあきば都下より目く米飯
とそて生を送るあきとあは上なき榮耀あらすや然れど
も都下よりハ稗飯松菜の味あらすて済くもいひ
き其ゆえハ治平も忽ち乱世の趣あるハ凶年飢饉のと

きあま既^す天保^{てんぽう}年の飢饉^{ききん}予^よ下谷^{しもや}中^{ちゆう}は住^す一^{いち}が近隣^{きんりん}一^{いち}市人^{しじん}の婦人^{ふじん}小児^{せうじ}を負^おて日^ひ予^よ園中^{えんちゆう}は来^き里^り溝邊^{こうへん}の芹^{せり}杉菜^{さしかい}を摘^とて飢^うを凌^{しの}ぐ者^{もの}ありありとある市街^{いちがい}は移居^{いしよ}して豊^ゆの^の善^{ぜん}より予^よも其^{その}あつたすでは杉菜^{さしかい}を喰^くふ^ふ近^{きん}う^う豊^ふ饒^{じょう}の年^{とし}は凶飢^{きうき}のときを忘却^{わくご}とす^すと自ら^{みづか}記^しし^しと

○仙臺^{せんたい}侯^{こう}台命^{たいめい}を蒙^{あづか}ら^らて仙臺^{せんたい}堀^{ほり}と堀^{ほり}ぬ^ぬる頃^{ころ}水府^{みづふ}義^ぎ公^{こう}より内見^{うちけん}舞^{まい}として黄粉^{きようふ}むす^すび^びは芋^{いも}の煮^にえ^えるを多く^{おほく}搦^おら^らて贈^{おく}らせ^せる^るとや実^{じつ}は^はれ時^{とき}分^{ぶん}質^{しつ}ある^るち^ちと知^しづ^づ或^{ある}人^{ひと}叢書^{そうしよ}

○權現^{くわんげん}様^{さま}近習^{きんしゆう}へ才持^{さいぢ}八志^{はっし}粥^{じやく}を食^くふ^ふよりち^ちと毎^{まい}度^ど内^{うち}お

一^{いち}を^をた^たし^しよ^よ天野^{あまの}遺^い語^ご

○大猷^{たいてう}公^{こう}或^{ある}時^{とき}松平^{まつへい}伊豆^{いず}守^{しゅ}信綱^{しんかう}を召^めて内膳^{うちぜん}のあつ物^{もの}れ中^{ちゆう}より一種^{いっしゆう}内膳^{うちぜん}を以^{もつ}てち^ちと終^はて見^{けん}い^いと侍^{さむらい}あり信綱^{しんかう}項^{かう}戴^{たい}終^は早^{はや}更^{さら}てあ^あさ^され^れる^るを^を料理^{りやうり}は仕^しえ^えと上^{うへ}則^{すなは}ち料理^{りやうり}方^{かた}の^のれ^れ大^{だい}城^{じやう}度^どの^のり^りは^はさ^さあ^あや^や退^{たい}去^そ其^{その}翌^{よく}日^{にち}登^{のぼ}城^{じやう}一^{いち}晚^{ばん}及^{およ}て市^し前^{ぜん}へ信綱^{しんかう}を召^めて昨日^{けふ}の城^{じやう}度^どめ^め何^{なん}れ付^つい裁^{さい}と^と思^{おも}ひあり^りは信綱^{しんかう}ち^ちる^るハ昨日^{けふ}拙^{せつ}者^{もの}は^はち^ちと^と思^{おも}ひ以^{もつ}て後^{のち}只^{ただ}そ^そで^で湯^ゆ水^{みづ}も^も終^はち^ちは^は彼^{かの}味^{あじ}は^は毒^{どく}等^{どう}ある^るやと試^しみ^みち^ちの^のれ^れ中^{ちゆう}相^{さう}智^ち義^ぎも^も喜^き喜^き然^{しか}ハ^ハ内^{うち}産^{さん}不^ふ人^{にん}性^{しやう}心^{しん}の^の企^くも^もなく^く念^{ねん}念^{ねん}至^し極^{ごく}の^の不^ふ為^ゐは^はお^お極^{ごく}い^いより^{より}言^い上^うす^す元^{もと}より大猷^{たいてう}公^{こう}ハ慈^じ悲^ひ正^{せい}直^{ぢく}の名^な将^{しやう}ゆ^ゆえ^えち^ちと^とち^ちと^と内^{うち}心^{しん}と^とけ^ける^る料理^{りやうり}

うのれ不調法一通の由志よりすでりるす
續武家閑談

○或時豆沙平川口より退出の刺中産不小百串さくの物盗取
拵出たるの豆沙を忍びて發き例に其品を露顯す豆沙の
曰汝あやまれ盗にそれを取らば拵出にいへば如此にい
そらずつ度又拵出るゆえはあそく拵はあらはるゝと志り
て其通に咎めらるゝすそれ退きて曰のろき者ハ此のけ
ありてハ妻子養育なりがゝ天下の由仕立ハ重箱の
肉より味嗜するがごとくすべしと志しを明せる肝
要ありと云く同上

○内夜人中の臺示料理多ぶらき内月付は見附られ是料理の

ちとやけは二の丸（五より）酒井雅樂頭（常は志づ）き
ゆえは此の歎き一は雅樂頭殿夫ハ由法度よりなられぬ
あり明日定めて内月付夜よりや来るなり其時出られて
然よりやけはて其明の朝登城いと云内月付夜は出
よとよりやけはと失念の日長の時よりいふはせし
料理振舞は弦よりやけるはれはあて昨日の是料理の事
いひ出する不及る済む是内夜人中の振舞は初め
なり 老談一言誌

○元和三年正月二日市謡初市謡代大小名登城猿樂舞等
群集して舞踏をむ市酒宴終りて後市流猿樂より
下づくと有るは此の當年初るゆえ定て其定あ

さて次才を遂て頂戴すべきと群衆の面々存念をいとし
る市目付中流といふや幸若小八郎阿と答へ其後すこ
出て市流頂戴せしむる者諸人こそを卒尔の至りと眉
をひそむるより同く与ふ大夫出前後を揖せし
相續て拝載す夫より親世太夫を初四座の者とも是を
頂戴す大名お肩衣をぬぎけづるより山のぬき然て
台徳公序と曰小八郎只今の振舞誠は宜あるより彼を
清和源氏の末桃井が後流なり父ハ太閤秀吉は侍或時
舊習の儀なつるや大坂天満まで大の男横合よ
と馳出秀吉は近付べしとす事急なり近習の老若周
章のよりてかれを捕るゝあらば其時幸若ま客其

足を蹴倒し則ち搦捕しとあるは懐中より双を隠せゆえに
金儀の上刺客は極る刺客ハ極る則其時恩賞を賜る當時其
才武門はあらすゝとも氏姓あるもれを覚えすゝ
武勇を顯すなり今日小次郎群は拙で一人すゝ出て盃を
のむる其器先祖は劣るゝらまをれなり向後今我の
格を以て定親とすべきもれあり幸若大夫も清和源氏岩
松の末なり彼等参妙して一向礼は宗門を改め
大御所は属し度々忠を奏すより其及同古曾てヶ振の
義切なり忘るはばるより其伯出けをバ諸人感激し
る覚えす涕泣すゝ 續武家閑談

義云此は多きことなりうてこそ上下和諧して寛

樂の由一與ともやなるべしとある孟子の所謂雅樂
俗樂のやうなあれども樂は衆樂してたのむの
こと同一致して實は寛大の由は礼儀の由沙汰もあ
らざらざる却て其祖先の勲功より里邑出はせり賞
譽あるや其人の心中のなかり郡有き里ひや
らせてともある感涙を催するあり

○烟子ハ古代なき物あり蔓草のあら壘國より渡るとい
ひ傳へるなりを好む人ハ毒物なりと云て其害を論
ずる人もあり酒多く吞む人ハ酒毒とて終に内換の病と
なり或ハ吐血或ハ浮腫或ハ黄疽ホとて死する人あり烟
子と好むて烟毒ハ中アて内換病を發して死する

子と見す開お然とハ毒物ハあらす良薬もあらす烟
と吸て試るは讀者写字してハ傳へる時よりハ
氣と運りて背を開くと覺ゆ食後は烟子と吸て口中爽
うあると覺ゆ此外ハ何の事もなし尤毒物の物也 舳舻訓

元和二年十月三日伯出の條東武実録に在る通也

條

一たむあ作るそれ町人ハ五十日百姓ハ三十日自分兵糧とて乾
舎るべき事

同賣はこれ同あの子

一同作は左所ハ為る料する姓を人ハ付る用る文つて出る

一同作は下の代官為る料五費文出すべき事

一 道橋は如前より付は若令油断所於有之其ふの
代官は料五文又出ず
右之條は堅く被 仰出也仍る下初め件

元和二年十月三日

安友對馬守

土井大炊頭

酒井備後

本多上野介

板倉伊賀守

○多葉粉のひるよりハ色々のまはよく記しきるなり
予が父弱年のころ大坂高橋にて唐人の装束しる高
人竹のきさるゝて一づく一錢づゝて人よのさせしるなり

考よりよりぬ萩系泉阿弥成也一園殿下向の節中
へ金入のたむこ入るなり其なりく入るなりなり
あるづきう近きなりハ大名もはらさるゝて試みてめて
其のまで叶ふぬれなりハ名もなりとていふるなり貴
人ハ雅なるづきなり ハ水隨筆

系云ハ水隨筆ハ柳亭子云享保元文のころ大坂番を勤
り人の作なり然せば元和二年に制禁の後もわ
は用る人ありて今世のおとくは制禁中あつても
さうで歳しき外もあさふと見えたり夫も格別人
るゝ害あるよあらすなりハ散髪の結果ありなり田畑耕
地の妨ふは一旦に制禁ありなりハ制禁も近世のこ

とく右の—からりちあくの奇巧美麗を好み金銀の烟
管より羅紗おろし此烟管は烟管筒あるハ金物も
ちあくの細工おのゝ世の宝を失ふはるる長歎息
すべし因云前編は載る烟管ハ唐古朝鮮を征ちられ
—と云長陣ある軍勢朝鮮より吞み習ひ其後慶長十
年又種を傳へて長崎橋の馬場より始て植て世は弘く
○茶ハ前編すで載る傳教大師歸朝の最茶の種を持て来
りて五十二代嵯峨天皇の時あり江州坂本に茶園の跡あ
りてあり植ゆふと傳ふより八十二代土御門内子に安
植ゆふと傳ふといひ傳ふ京都建仁寺の開祖千光國師榮
西入宋ありて歸朝のとき茶の種を持来りて柵尾に植

そまより世に廣まると云く兩説あきと傳ふ大師の
と然らん然小窓閑語は云吾郡は茶を用ふるは先ず多く
説あり本朝食鑑大和本草は見るべし曰く—ハ挽茶の
こよりて煎茶ハ近世のこよりハ本據なき説なり余一
日類聚國史をよむは第三十一卷帝王部曰弘仁六年四月
癸亥幸近江國滋賀韓崎便過崇福寺大僧都永忠手自煎茶
奉御と見えし然せばせんハ茶も上古よりあり云く弘
仁ハ嵯峨帝御宇の年号あり郊花園漫録の一説は此時
代ハ唐茶より日本茶ありとぞ何れは是あらんはてま
茶の湯と會合法式をわて茶を喫するハ東山殿の代より
りて忠功真節の大名を集めて丹心を合せんとおなり

子園喜謂之八種唐菓子と見えんが餠籠桂心渾沌の三
つ唐より傳へる繩ハ此方の製あるべしその菓子は加久
繩の形しるを俗は福ぢぢといふと古々の語の雅
俗をさるべし近世初下乾菓子の製造年々より奇巧を競
ふる甚しきにつけても上世の質朴をたもてべし況や上
世よりつらなる砂糖といふは世より行きてよりこれにて
天下の果子の味一変あるをや 南畝莠言

○大佛餅ハ根元京都誓願寺前よりこれを製するを堂上方
つと召し召するまで其風味格別ありき方廣寺大佛殿
の前はあやうく好味あり江ノ浅草より製するハあやう
倣ひて大佛餅の名目とす近世数品の餅ありしが餅は

つき餅あんもちるもちれ類ひ多く提重折折は盛んで
義と盡きて中より餅はむしハもろく賞翫をりもれ
なせともそはいやき餅より折折提重ハ誥ぢぢ
贈ある客ハおぢぢ牡丹のうちは似るより
牡丹餅と名付する萩の花うい餅とも云堂上方はを々と
てし中貴翫あるよりあり寂明寺殿足利義氏の許へ鶴
岡社系の序は立寄をいし一献はおあそび二献は海
老三献はうい餅とてやとぬとつむし子に思へるなり
片田舎より歴々の振舞をり餅より餐應ハむしれ
遺風なりこうあらず古實ハ田舎に残り繁華の地ハ
失るもの多し 近代世事談

○世俗先祖を祭るは美味珍膳を用う今按ずるは非なり故實
は初穂一夜酒を以てまつる土器を用うるを柳宮を用
う柳の枝を孤檠してありきるれなり春日の御社にて
ハ掛の黒木を並べ藤をつらりあて凡そ供物を拍
繋はるなり古へ儀をうけてと云器をひらてと云
はれよとあるべしけりしむりあり
伊勢の宮朝夕の儀膳供物蒸飯水四盛は塩飯斗飯ハ二
杯半のあらげ酒ハ一夜酒飯を水はひりあるをれなり
諸物も蒸して用り煮るこゝろあり有る村の工師の物忌
作で進る土器を用う御箸柄を以てつくる毎日兩度御膳
厨は於て高几の上よりなる釜ハ土釜ふり鉄釜を用

るゆあり瓷器を用ひず華美の器を凡宮殿瓦を忌み葺
ふぎを用ひたり皆驕と抑へ奢をいよりめ萬世は質朴を
示しむるあり
拙堂讀礼筆記

○式正の餐膳は土器白木膳を用るハ上古の風俗にて清浄を
貴ひて且質素にして金銀の箔をてがみ丹青を以て彩色
とするを古代の本意とすは奢りなり又彩色の具ハみ
る膠水を用るゆえ清浄ならぬ彩色を見る目も潔うら
ず土器を浅き物まで食物多く入らぬ故に盛にするなり
飯もけりし盛なり甲立とも餐立とも云て白紙を三角
に切て土器のうへに付るを蓋とするものなり是を蓋
きを防くことあり後代は金銀の紙を表りてはあへん

てうゝのめあぶすゝひを取てなぐて付るやをす
奢りて清浄あらざる古儀は背より白紙ハ清一是のこり
限らず後代奢侈は依て古人の本意は速に古実を失ふ
こと多し 舳舻訓

○天明年間白川侯の諭書は我朝朝夕給とのつを膳番の者
能く承て居る此儀ハ先達ても内々申出する事年
始ハ朝五節句式日ホすべく祝儀の膳部は先代の例を以
て調進しつする事とねえ年始高盛すへく之方まで
すえ格のるハ御先代より任給料の膳部は至てハ差
略すべき事とよ年始ハ三汁七菜五節句ハ二汁七菜
式日ハ二汁五菜と定あまき奢る事といふ年始二汁七

菜五節句二汁五菜式日ハ一汁五菜と以来て相定此上
りし一一度いども祝の膳ハ側向の者其日の順番は頂
戴しすことや例はなりて居る承てハ一はつり替て
省略も不相成いふ多ハ朝ハ汁と香の物と夕膳ハ
煮物もて平皿とれも一つ鱈あくと何れも
一つて居出は飯食ハ汁も煮えれもひそりてあ
えものもてひとつりて祝儀の時吸物ハ一つづも
そまぐで酒は肴ハうち蛇鰯ぶりて済す 聖武秘
要記
○水戸黄門光國卿群臣は賜ふ條令の内は家中の士常より
合の料理内々宣置は通て一汁一菜をもて成程粗造は成
る儀ハ無きは塩梅取合の善悪ハ左のへ挨拶も及ぶ

まじき事よ士の寄合遊い多むひり親を求めお
もろと述べ異見を聞て語て慰のそつりと馳走と亭
主の礼義を整いて福んぶらよとてたすをこそて中
代ハ馳走とて料理の取合座上の物教寄あは心を盡
隙を費い何の為よ哉

○浦井瀨岐守忠勝君右側は右仕一福島雲南とよ小坊主
を既中間小頭の子あり一毎度今朝の飯の菜ハ何
るぞと尋ふ折舊ハ彼が手の内ハ鯉節幾節とハ何程
とハ自筆よつやれ是を澄扱とて臺所役人ハ貫
つと仰らせ一あゝとあア一とふ或時今朝ハ何そ菜
アと尋ふと尋ふハ豆腐を味噌よて煮て給いとせそ

汝親の身上よ大豆の味噌を持す糠味噌とある
と宣へそいや馬れ大豆れ内を取いつとくも大豆
の味噌を六一ら一とや上々れ大は笑をせぬ馬の
大豆よて味噌を搾ゆるとも少一つとるづ多く取て馬
を瘦れとて親よとと仰々となり

○同君一年若州飢饉ありある村別て餓死及んとす
その多し是を救んは夥しき俵敷ゆえ一往伺す叶
いと相談一役して早飛脚を以て言上有々せバ忠勝君以
の外怒らむひ自筆よ書を認めとて金銀米穀を何
のるよ貯置むれと心得いや國許を預け並甲斐なる一伺
るも事よるなり彼飢人を一人よくも餓死をバ諸役

人の城度多るべしと甚く其怒の内自筆を来はきしと
○同君の時塩噌なり何某塩噌を私用は取違ひし訴ありしが
忠勝君其者を召し召有るは味噌の上ハなと桶をそ
風味ありきゆえ中間どもは給はを中よりきとる
を諸士士の料理は用ひはけ振のちを私曲とすやと
上りきばはし有るべし念を入るべしと宣ひは味
をすなり

○同君の時奥小姓表小姓と別で初めたる奥小姓晝夜相詰り
きて詰所は眠て居ても詰所を明ける者ハ咎むなり詰
所を明けるそのを味ありあり其外は度る向ま
で不時は月付を廻は詰所を明ける者を帳面は記は

る是を鉄炮帳と名付しありて毎晩暮六の時より講を
と聞たりと五つは時計うちハ講を止らしは夜食出
酒ハ織部杯より四ツ宛台上よりあり三ツたり五ツ
ある四ツよりと宣ふ四ツ時計より寝間へ入ら
ちりしは眠て来るまでハ大方舞をやらせぬとこ

○明暦三丁酉年正月同君牛込の市屋敷内の馬場へ出はをぬ
ひしは風烈しく土芥を吹上げ怪しき風あり火事覚束る
しと宣ひしは本郷出火と聞けしハ普請を以て一人召
て近在へ系で直限はあつず早に米を調立べしと仰付
らせ大火は及びし登城あるべしと宣ひしは賢察の
通で江戸中古今の大火より浅学は藏すぞ残らず焼失し

て関東の米多く公儀へ市買上は諸大名米より支なるは
竜の口内屋敷敷焼ゆ急上下牛込市屋敷は集々れど飯
米此より支なりと江戸中評判ありとふ此時市域内外
不残位は焼失ゆ急家綱公西丸より所移りあり火鎮で忠
勝君市歸り有て市子息忠直君の奥方慶雲院殿へ市物語はハ
婦人ハ常の覚悟あるべきふとあり火事後西丸よりやう
く飯と焚たれども苦物ふきゆえ大桶は飯を入抄子粒
本添て女中の前より出るは老若の婦人恥て市を食
ちんとする人ありとふは近江面進より市出度ふ
とふ市代長久とふそふは数十年前末世中とふ静
は治々市上下衣食住はあきとて此度市とふとく焼失

しや事の新なるふそ市出度ふと殊は此騒動の中
はあやしきやで給ふは澤山あるとふありうとけはら
は某頂き初んとて紙とふは市自身抄子を取て飯と
盛に喰とふとて大勢の惣女中皆く件のおとくして
食とふあり近江殿ハ氣量ある女中ありと候とふは
あり以上五條玉露集

○或書はいつく天正年中は南蛮の商船始て多ふは此種を貢
すそて長崎の東土山は植ぬ或いはとく慶長年間ハ南
蛮の人よりとて本邦よりつふとあるひいはとく慶長年中
は朝鮮よりとて我朝はめくると或人の説は秀吉公
朝鮮陣のとき市士卒吞覺えうつ其種も到来すとあると

紙は慶長十年は異國より日本へたゞこゝろめて置けると
諸君の説多くハ安永年中よりハ然らバ今寶曆五年は
いづり凡百六十七年よりぬ 烟草記二冊その宝曆六年出版然ハ
今安政四年迄二百八十九年よりなる
○たゞこれ初めて渡り一時節をささるるといふを此あくる
紙にて烟草をささる葉のぶとよりなりて吞それ紙
はよりとき紙半分ハたゞこをふとくさき半分ハ紙を
細くさき火を移し細きうよりすゐとあり或をよ
し細き竹をそぎてそげするといふをさきよりての
くるとのや其後番客とも吸後をもちより長崎人
是をさきよりて銅をそてきさるつより吞或ハ頭尾を
作てあひがハ細き竹を續合せてもちゆめをより人の

○意業よりおのせて烟管烟袋管烟盆火器唾脱より至近金
銀銅鋤鐵鉛金襴織物奇材珍木異竹希石ホをそて種々の
異形を造りてあそぶおとよりハなりねとくより前
を客來の馳走は烟草を吸管よりそりて清取渡り礼
をとりハするより火をとり火を入て烟盆差出の礼
也 同上

義云たゞおのちと數ヶ条載る煩ハくさきとまれと
のを人々日用の事ゆゑ其源始をあらんよりいと
なげきる

○むろ
大猷院様代は代はなり衆とて毎日登城して内談話ホ

中上らと一衆中毛利甲斐守秀元丹羽五郎左衛門長重蜂
須賀達庵林道春等をわかれ衆中からかく登城し
てそまゝの館より辨當するてくるとて萩のるゝ寄
合ちせを食ひぬめづらき菜もあはばるゝひは取
りて賞ひぬめづらきや毛利侯の辨當は鯉のあて々
せバちせハめづらきとてみみく賞味せしとたり
阿部對州ハ焼飯を紙はきいて持来あり由書食より
あがらせしそのつゝ紙の皺をのぞきそれ紙はき飯
をひろひてこせを給らせ其跡を鼻をつくるとせし
いとろくもれありとぞ 夜譚隨筆

○井伊兵部少輔直政よりしそむ

東照宮甲州若子表は於て北條氏直と對陣の時ある
夜大久保七郎右衛門忠世よりしそむ衆うちより
くうおき料理は早くと出あるべしと申するより
急ぎゆきむろへを陣屋の出座は火をふき自在釜を
平鍋のふつゝあるをうけて根芋の葉も莖もとて糠味
増して煮るなり座中ハ八島井新太郎忠政石川長
門守康道本多彦次郎康重岡部弥四郎長盛大久保新十
郎忠隣おど焼火を取らば居らるゝ七郎右衛門座をひ
らき萬千代あまぐと清らる其芋汁いよ煮えぬる
をよくは椀に盛古ちり食たり直政つゝ椀は堆盛
てあふるをとりけり喰るは殊の外あちひあ

く食するは堪へず下は堪へて居るは流石萬千代殿
を若き衆より華美ありとてみるは數椀あらそひ喰
る七郎右衛門曰萬千代どれいづて食しやれやとな
ては少し醬油を入ふはよくと挨拶するは
ややうそは奢り左やうそはそれ今よりあるべき
うとありや七郎右衛門申すはいづれよくあるら
はよの芋汁の味のするはをみる賞翫せしむるは
乃士卒を食し寒暑を志のぎ暑熱をいとく白刃
身をくき主人の命をあげうちて其の切
るこそ武道義理より百姓をすこのやうれそのを

作て出づる辛苦して主君は收納し士卒をやいなこのやう
ふをせしめれば口に入るやうあらす妻子も飢寒に及
ぶなりあらば大將たる人こそそのやうあるべきあら
て今屋形は次第は敵國を多く志しはけをぬけぬ
く大名よりあるべき只今の芋汁の味を忘るは士卒を
撫愛し百姓を憐愍あるべきなりやあらそひをわすれぬ
る武道はあら君臣の義しをわすれぬ屋形様つひ
武道をわするづらざるはあり臂をい
眼をいからんとしやあらば家業をいれぬ
あらなり家業の第一は士卒を愛するなりはあらそひを大
事の用は立つてといひを今月底に残して感ずる

とすり 故老諸談

○上杉謙信上戸あり景勝も大上戸あり直江山城石坂檢校も上戸ゆえ不酌相ありて酒盛ありけりめは縁頼へ出酒持てあるきとて小き杯をていつて呑みけり代看もな

武邊雜談

○戦國せんごくのときハさうあり世おさすりもむり能人を棄らぬをとりぞう義食ふでれども老けておさぬあふくき安岡上總介此許へ直江兼續のやありは折なり朝餉のときとて出さうとて中けありけり直江菜をバ何とめさるるやらんと同くは慕と塩とて給ひぬといへば塩もてあるありぬべきは慕までハよりるとい

きとるるときはさうと慈父のいひききとるを覚え

雜話藻塩草

○秀吉公天下をとりめは付尾中村高六百石餘の在所を諸役年貢所領を永代ゆるはるるを秀吉公は生在所にては百年頭祝儀は八大根牛房を進物とあけけりといふるやらしは秀吉公高麗に切取るに於いて三年目は大坂へ出陣あさしは中村郷中より今度高麗まで切取り何りてとなさるめりき儀は百年祝儀進物ハ越前綿とてのいふて大坂の臺は積りあけやいとあらは秀吉公おなせらるるを日本ハヤと及むる高麗まで切取り何りてなりけり儀あさるは中村百姓ども永代作取と

公の由きつちるもきつちるゆきなりとける箱おぼろい
つて 故老諸談

○京都きやうとより大坂おおさかへゆきかへるとき

権現様ごんげんさまの意いはつぎせし腰兵糧こしやうらうよりすめいし
上様うさまの臺所たいしよより白米しろこめ三升さんしょう味噌みそ少すこし鯉うなぎ節ふし十塩鯛じふしお一持いちもちする
ていといとちを付つけし 古士談話

三省録後編中終



